



※本資料に記載の情報や画像を、公益財団法人米日カウンシル-ジャパンやジョンソン・エンド・ジョンソンの許可なく、無断で転用することやSNS等で紹介することはお控えください。



災害看護を学ぶ。

日本は、地震などの災害が多い国です。

2011年に発生した東日本大震災では多くの尊い命が犠牲になりました。

しかし、日本全国から駆けつけた医師や看護師によって

多くの命が救われたのも、また事実です。

「TOMODACHI J&J 災害看護研修プログラム」は2015年にスタート。

3年間で延べ28名の学生に参加していただきました。

彼らがこのプログラムで災害時における看護の在り方や知識を身につけ、

将来、日本の災害看護分野を牽引するリーダーとして活躍すること。

それが、私たちの一番の願いです。

CONTENTS

03	What's "TOMODACHI"?	25	プログラムの未来
05	プログラムのあゆみ	27	今後の方針
		29	参加者のその後
07	参加者紹介	31	SPECIAL THANKS
13	メンター紹介	34	協賛
15	プログラムの流れ		
	17 事前研修		
	19 米国研修		
	23 事後研修		

What's "TOMODACHI"?

TOMODACHIイニシアチブは、東日本大震災後の復興支援から生まれた官民パートナーシップのことで、教育、文化交流、リーダーシップといったプログラムを通して日米の次世代のリーダーの育成を目指し、公益財団法人米日カウンシル-ジャパンと東京の米国大使館が主導しており、日本政府の支援も受けています。日米関係の強化に深く関わり、互いの文化や国を理解し、より協調的で繁栄した安全な世界への貢献と、そうした世界での成功に必要な、世界中で通用する技能と国際的な視点を備えた日米の若いリーダーである「TOMODACHI世代」の育成を目指しています。



橋本 彩

プログラムマネージャー
TOMODACHI イニシアチブ

プログラムを支えるのは、確かな実績を持つスタッフ

PROFILE

TOMODACHIイニシアチブでプログラムマネージャーとして勤務。高校生、大学生そしてヤングプロフェッショナルを対象としたTOMODACHIイニシアチブのプログラムを管理、運営している。前職では、在日米軍で勤務し、ベストプラクティスと認められたメンタープログラムをはじめ、各種のプロジェクトや発案を実施、管理していた実績を持つ。また、2011年に在日米軍が行ったトモダチ作戦に、後方支援の調整員として参加。日本と米国の官民両方の組織にて20年勤務し、司令官や社長などのトップマネジメントに直接仕えるポジションを経験してきた。恵泉女学園大学人文学部にて学士を取得し、フェニックス大学でMBAを取得。

[TOMODACHIイニシアチブ webサイト] <http://usjapantomodachi.org/ja/>

TOMODACHI J&J 災害看護研修プログラム

東日本大震災においては多くの医療機関も被災し、被災住民は深刻な健康の不安にさらされました。また、東北地方沿岸部は特に医療過疎が指摘されていた地域であり、大震災で状況はさらに悪化しました。この経験から、住民の近くで寄り添う看護従事者を育成・教育することは将来の地域復興に大きく資すると考え、東北大学で地域医療に携わる菅原準一教授の協力のもと、看護学生の能力育成とリーダーシップの強化を図る教育支援を構想。2015年から3年間にわたる「TOMODACHI J&J 災害看護研修プログラム」がスタートしました。本プログラムは、看護学生の災害対策分野での専門知識の深化と次世代を担うリーダーシップ育成を目的に、主に事前研修・米国研修・事後研修の3つで構成されています。事後研修内で行われる報告会では、看護学生や災害医療従事者、災害看護に関心を寄せる方たちに対して学んだことを共有します。

- プログラム開催地
[事前研修]
宮城(仙台、南三陸、石巻)、東京
[米国研修]
ニューヨーク、ニュージャージー、ワシントンD.C.
[事後研修]
仙台
- 主催
公益財団法人 米日カウンシル-ジャパン、
TOMODACHIイニシアチブ
- 協賛
ジョンソン・エンド・ジョンソン 日本法人グループ
- 実施運営団体
ローラシアン協会

プログラムのあゆみ

「TOMODACHI J&J 災害看護研修プログラム」は2015年から2017年にかけて実施され、多くの看護学生が参加しました。3年間で、プログラム内容も少しずつ進化。より充実した研修となるよう工夫を重ねました。このページでは、本プログラムにおけるこれまでのあゆみをご紹介します。

2015 1年目

2015.2～

本プログラムのキックオフ。宮城県内のみを対象に募集。仙台市内にて説明会を行いました。

2015.8.10～

座学や見学を中心に米国における災害医療の今を学びました。ニューヨーク日系人会や大使館への訪問も行いました。

募集開始 事前研修 米国研修 事後報告会

2015.6.10～

東京では災害医療分野の専門家をお招きし、知識を深めました。仙台ではフィールドワークとして石巻を中心とした被災地域を訪問しました。

2015.9～

仙台、東京、高知にて事後報告会を開催。学生の発表のほか、ワークショップやパネルディスカッションも行いました。

2016 2年目

2016.3～

参加者の対象を宮城、岩手、福島の3県に拡大。郡山、盛岡、仙台にて選考会を開催しました。

2016.8.6～

以後、ハリケーン・サンディの被災地であるトムズリバーやジャージーショアへも訪問するように。

募集開始 事前研修 米国研修 事後研修

2016.6.25～/7.9～

東京と仙台で開催。仙台のフィールドワークでは被災後から発展したビジネス現場の見学や南三陸町長との交流を実施しました。

2016.9～

事後セミナー2回の他、各自でアクティビティを企画・実施するように。学校や地域の図書館などさまざまな場所で行われました。

2017 3年目

2017.2～

募集範囲を拡大し、震災時に被災地に在住していた全ての看護学生を対象に。仙台にて選考会を開催しました。

2017.8.5～

全体的に体験型の演習が増えました。集団災害を想定したトリアージ訓練や病院を現場としたHUG形式の演習にも挑戦しました。

募集開始 事前研修 米国研修 事後研修

2017.6.24～/7.8～

仙台にて開催。HUG(避難所運営ゲーム)を導入。フィールドワークでは南三陸町のほか石巻市の大川小学校跡地も訪問しました。

2017.9～

この年はグループでの活動は基本不可とし、全員個人でアクティビティを企画・運営。さまざまな企画が出揃いました。

MESSAGE



小松 恵さん

メンター兼アドバイザー
岩手医科大学
看護学部 共通基盤看護学講座
特任講師

このプログラムは、渡米準備のための「事前研修」、2週間の「米国研修」、事前研修と米国研修での学びをまとめる「事後研修（報告会含む）」の3部構成（学生実働約8か月間）を3か年計画で始動しました。初年度は、災害看護に特化した海外研修の前例がない状態で、試行錯誤の運営でした。私はメンター1人で役割を遂行する戸惑いはあっても、この新プログラムが素晴らしいものになるという期待の方が大きかったことを覚えてい

ます。2年目は、過密だった研修スケジュールも精練され、訪問先や研修内容を簡素化し、振り返りの時間を持つことで、学習内容や経験したことへの理解を深めることができ、事後セミナーでは、アクティビティを計画実施して、プログラムでの学びを地元に戻元する企画が追加されました。3年目は、事前セミナーに国内でのDMATや実際の災害支援経験を持つメンターのレクチャーを加え、HUG実施など実践的な内容の準備になりま

した。米国研修も演習が増え、まさに理論と実践が学べる内容に進化してきています。日米の関係者で内容を検討し、学生の意見を反映して、皆でプログラムを磨き上げてきた結果だと思います。この研修内容は、現役の災害看護を学びたい看護師に対しても充分要件を満たすものと考えます。このような貴重な経験ができたことに感謝し、総括とさせていただきます。

参加者紹介

1期生



岩淵 阿椰菰さん
石巻赤十字
看護専門学校 2年
宮城県石巻市出身

今回のプログラムに参加し、自分の目指すものや将来像が明確になってきて自分は何になりたくて、何がしたいのか目標が見えました。災害看護やメンタルヘルスについては学校の授業以上に詳しく、実践的に学べたのでこれら培ったものを今後の勉強や実習、更なる自分の学びを応用化できるように活かしていきたいです。また、自分の将来へつなぐ1つのステップとなった気がするので、この経験を財産にし、看護師を目指していこうと思います。



小野寺 奈央さん
気仙沼市立病院附属
看護専門学校 2年
宮城県気仙沼市出身

学生だから何もできないのではなく、自分がしたいと思ったことを形にしていくことが大切だと学びました。今後はこのプログラムを通して知り合った多くの人を大切に、自分が何かを起こしたいときや、友人が新しいことにチャレンジするときは積極的に参加し、自分の周りにやりたいことをアピールして一緒にやってくれる人を多く集めたいです。また、純粋に看護を必要としている人々の元へ自ら行き、看護を提供できる看護師になりたいです。



星 いくみさん
仙台徳洲
看護専門学校 2年
宮城県仙台市出身

学んだことは、本当に多かったです。自分のなかで何回もリフレクションノートを見て、看護師になるその日まで、振り返りたいと思います。看護師になって、このプログラムを振り返ったとき、どれだけ凄い施設を訪れていたのか、どれだけ凄いことを学んだのかを今以上に感じます。身に付けた看護師としてのスキルと、このプログラムで学んだことを活かし、災害時に、多くの命を救えるようになりたいと思います。



藤沢 爽風さん
宮城大学
看護学部看護学科 4年
宮城県仙台市出身

災害看護には以前から興味を持っていましたが何をどうしたらいいのか、自分でも明確な答えが出ていませんでした。しかし、今回のプログラムを通して、今まで見えてこなかった今後の方向性が見えてきました。看護がより良い方向にいくという可能性は無限にあると思い、自分もその看護の可能性を広げていく一員になりたいと強く思いました。看護学生のうちからこのような経験をしたことのある人はそう多くはないと思いますが、様々な人と互いの経験を活かし、看護界を盛り上げていける存在になれると思います。



宮川 菜津美さん
石巻赤十字
看護専門学校 2年
宮城県石巻市出身

このプログラムを経て、将来への様々なビジョンを持つきっかけになりました。看護師として一人前になり、世界を舞台に仕事をしていけるようになって、少しでも苦しむ人を減らしたいという思いを持って看護活動ができるようになりたいです。その大きなきっかけをくれたみなさんに伝えきれない分の感謝は私のこれからの活動をもって社会に還元していきたいです。そして、私自身も「きっかけ」を人々に与えられる人になりたいと思います。

「TOMODACHI J&J 災害看護研修プログラム」に参加したのは、東北で日々勉強に励む看護学生。

1期生8名、2期生12名、3期生8名を、参加した感想と合わせてご紹介します。

※所属学校、学年は参加当時の情報です。



三浦 万里さん
仙台医療センター附属
仙台看護助産学校
看護学科 3年
宮城県仙台市出身

まずは周りの人に学んだことをわかりやすく伝え、災害のことを自分とは関係ないと思ってしまう意識を少しずつ変えていけるよう働きかけていきたいです。私は特に事前準備の必要性について学びを深めたので、その部分は特に強調して伝えていけるようにしたいです。災害の規模に関わらず、発生時には命を守るため対応に力を尽くし、精神的・社会的な面からもアセスメントして継続的にサポートできるようになっていきたいです。



佐藤 美輝子さん
宮城大学
看護学部看護学科 4年
宮城県仙台市出身

自分の学びを周りと共に共有することで新たな気づきがあり、さらに学びを深め、また新たな目標を持つことができている。また、この学びを保健師として活動していくときに被災地や災害公営住宅に住む住民の方々間の交流やこころのケアをしていく場面、災害訓練の計画を立てていく際などに役立てていきたいです。自分自身が研修を通して学び考えたことも、他のメンバーや看護職の仲間、他の職種の方などと協力しながら実現できるようにしたいです。



菅原 麻里菜さん
仙台青葉学院短期大学
看護学科 3年
宮城県仙台市出身

研修での学びをもう一度振り返り、将来的には地元で働くときに研修での学びを活かしたいです。プログラム全体を通して、アメリカでも、日本でも多くの人と出会い、繋がることができたことで、研修に参加する前の志望動機にも書いていた「人対人の精神」という考えが、プログラムに参加して「人と人との繋がり」と自身の中で改めて捉え直すことができました。今までの繋がりもこれからの繋がりも大切にしていける人になりたいです。

2期生



藍原 みくさん
福島県立医科大学
看護学部 3年
福島県福島市出身

今までは海外で看護活動をしていくことしか目を向けられなかった私がいきました。しかしこのプログラムを経て、自分の故郷についてこんなにも無知でいいのだろうか、もっと地元のために行っていくべきことがあるのではないかと、いい意味で立ち止まることができました。しかしまだまだ未熟な部分が多いということも痛感しました。自らアクションを起こしていくことを今後も大切にしていながら、福島の医療に向き合っていきたいです。



明下 海綺さん
岩手県立大学
看護学部看護学科 4年
岩手県宮古市出身

プログラムを経て、これまで漠然としていた思いから自らの目指すビジョンをつかむことができたと同時に、自身の課題も明らかになりました。相手にわかりやすく伝えることは、災害対策の課題や備えの方法などを、他者に広めていく際に必要なスキルだと痛感しました。この研修は、メンバー間でも学びあう研修だったと感じています。今後も課題に向かって成長しながら、在宅医療の現場で災害対策のアクションを起こしていきたいです。

参加者紹介



石川 理那さん

東北福祉大学
健康科学部
保健看護学科 3年
宮城県塩釜市出身

私はプログラムに参加して、沢山の方々と出会い刺激を受けたこと、多くの方々が私たちをサポートしてくださったことで、災害支援ができる看護師になりたいという思いが確固たるものとなりました。プログラムは終了しましたが、ここからが始まりだと思います。自分が学んだことを活かして、地域貢献や看護の場においてリーダーシップを発揮していける人になりたいと思います。感謝の気持ちを忘れず、将来自分が目指す看護師になりたいです。



高江 由香さん

東北大学
医学部保健学科
看護学専攻 4年
福島県南相馬市出身

最終報告会の中で、「研修は終了してもここからが私たちの始まりであり、今後今回の学びを活かして自分自身で行動していくことが重要だ」と言われたことがとても印象に残っています。また、この研修では日米両国の医療における違いや共通点、そして看護職の仕事には病院以外でも多くの活躍の場があることを学びました。これからは次世代のリーダーとして自ら動き、周りの人々の心を動かせる医療従事者になりたいと思います。



及川 くるみさん

東北大学
医学部保健学科
看護学専攻 3年
岩手県大船渡市出身

今回このプログラムに参加して、自身の学ぶ姿勢が変わったと思います。今までは受け身の姿勢でしたが、これからはいつも積極的な姿勢で勉強していきたいと思います。また、災害に対応するには地域のことをよく知らなければならないことも学びました。まずは自分の地域のことについて知ることから始めていきたいと思います。これから何ができるか考えていくことが今の私にできることだと思うので、これからも頑張っていきたいと思います。



千葉 奈緒さん

宮城大学
看護学部看護学科 4年
宮城県石巻市出身

研修中「9.11の悲しみが10年以上続いているということに衝撃を受けた」との言葉に、東日本大震災の悲しみも続くものなだとドキッとしました。しかし、それに気づいたことで今後の心のケアの重要性を再確認することにつながりました。来年からは看護師としてのキャリアをスタートし、自身の未熟さを実感することと思いますが、将来的には病院内だけではなく、地域も共に視野に入れられるような広い視点を持つ看護師になりたいと思います。



佐々木 ちはるさん

岩手県立大学
看護学部看護学科 4年
福島県いわき市出身

全研修を通して、以前の自分を振り返り、将来の自分についても考えることができました。今後は東北のために、自分と同じような体験をした人や子ども達のためにできることを考えて実践することが課題だと考えます。私は関わる人の心と体の健康・安全を守り、自ら行動を起こすことのできる人、そして養護教諭になりたいです。また、このプログラムを通して出会った仲間やお世話になった皆様とこれからも繋がりを続けていきたいです。



馬場 仁美さん

福島病院附属看護学校
看護学科 2年
福島県郡山市出身

災害看護という分野においては特に知識の乏しい未熟な私でしたが、共に研修に参加した仲間と日々助け合いながら、無事に乗り越えることができたと思っています。また、このプログラムを通して沢山の方々に話を伺うことができ、全てが本当に貴重な出会いだったと感じています。このつながりをいつまでも大切に、看護師となってからも互いに高め合える存在となっていけたらと思います。この研修での学びを忘れず努力を続けていきたいです。



澤田 陽希さん

仙台医療センター附属
仙台看護助産学校
看護学科 2年
宮城県遠田郡出身

この研修を通して、私自身、東北の災害対策を考えることができる看護師になりたいという将来のビジョンを明確にすることができました。またそこから、今私だからこそできることについて考えるようにもなりました。持ち前の粘り強さで地域の方々に学びと知識を発信・還元ができるよう努力していきたいです。今回11名の、同志でもありお互い高め合える存在でもある仲間に出会うことができたことに心から感謝したいと思います。



緑川 結佳さん

白河厚生総合病院付属
高等看護学院
看護学科 2年
福島県石川郡出身

私達は様々な場所に行き、本当に多くのことを学んだのだと改めて感じます。特に私は多国籍社会である米国で学んだ、患者の様々なニーズに合わせた病院の対応やコミュニケーションのあり方が印象に残っています。今後も自分の将来の夢である国際教養のある看護師として活躍できるよう、プログラムを通して築くことができた人と人との繋がりが、学んできた知識と活動の成果を大切にしながら、今後も努力していきたいと決意しました。



須藤 碧さん

仙台青葉学院短期大学
看護学科 3年
宮城県本吉郡出身

必ずしも全てを完璧にこなさなくても良いということ、ゼロから少しずつ積み重ねることが成功に繋がることを知って、多くのことに挑戦したいと思いました。将来はDMATの一員になり、JICAの国際緊急援助隊に登録したいです。国内外で災害が起こった時に飛んでいき活躍できる看護師になります。自分の経験を伝えていき、そこから気持ちを共有し合うことでストレスに繋がる感情を少しでも軽減できるようになりたいです。



横山 華保さん

東北大学
医学部保健学科
看護学専攻 2年
宮城県名取市出身

振り返ってみると、あっという間だったと感じます。全てが私にとって生涯忘れることのできない素晴らしい経験になりました。またこのプログラムを通して、普通に大学生活を送っていたとは出会えない方々とお会いする機会を頂き、感謝でいっぱいです。自分の学びを他者にも共有し、将来は災害対応のできる看護職、そして国や地域、患者さんのバックグラウンドを深く考え、個々に合った医療活動が行える看護職を目指して努力していきたいです。

参加者紹介

3期生



阿部 美沙さん
石巻赤十字
看護専門学校 2年
福島県南相馬市出身

「連携と協力」の大切さを学び、今後の活動にも沢山の人を巻き込んで共に学びあえる環境を作れるようになりたいと思うようになりました。「皆でやること」で物事を様々な視点から見ることができ、大きな成果や学びが得られ、視野が広がることを知りました。今後は自分の活動を継続し、更にTOMODACHIアラムナイとして活動に参加することで、自分のネットワークをより広げて活動の場を増やす機会を自ら獲得していきたいです。



鳴原 菜穂さん
聖路加国際大学
看護学部看護学科 2年
福島県南相馬市出身

このプログラムでは災害看護以外にも、分野を問わず多くのことを学びました。自分の人生においてこのプログラムは大きな転機となり、これからの目標や方向性を明確にできましたが、自分がこれからそれらをもとにどう行動していくかということが大事だと思います。ここで得た「実行に移す力」「主体的に取り組む力」をめいいっぱい用いて、目標を達成していきたいと思います。また、感謝の気持ちを忘れずに日々邁進していきたいと思います。



大宮 薫さん
仙台医療センター附属
仙台看護助産学校
看護学科2年
宮城県柴田町出身

自身の成長を感じられたと同時に、将来の看護職としてのビジョンが見えてきました。私のビジョンは「災害時に一人一人の生活と健康を守りたい。」個々の生活に目を向け、多様性の中でその人にとって最も適切な支援を考えていける保健師になりたいという思いが明確になりました。これからは8人のメンバーがそれぞれ別の道を進んでいくこととなりますが、また会えたときに「私は今、こんなことを頑張っているよ!」と言えるようにしたいです。



志田 美波さん
岩手県立大学
看護学部看護学科 4年
岩手県釜石市出身

研修中は私にとって本当に大変で試練とも言えるほどでしたが、その分得たものが大変さをはるかに上回るほど大きいものでした。得たものとして、プレゼンテーションの仕方、準備の重要性、そして社会人になるということについてです。改めてこの研修で本当に多くのことを学ばせてもらうことができたと感じました。今後看護師として働くこととなりますが、自分が学んだことを最大限に活かして発信していく側の人間になりたいと思います。



小林 夏歩さん
岩手県立大学
看護学部看護学科 4年
福島県猪苗代町出身

自分の震災体験と初めて向き合い、自分が知らなかった自分を知り、自分の本当の感情に無意識に蓋をしていたことにも気づきました。私にとって、安心して感情を表現でき、涙を流せる場所ができたことは、とても貴重な経験であり、自分の感情を出すことの大切さを知りました。来年からは看護師として、患者さんの感情を受け止められる存在になりたいです。また、人として周りの人の感情を大切にできる人になれるように努力していきたいです。



山口 朋花さん
仙台医療センター附属
仙台看護助産学校
看護学科 2年
宮城県大崎市出身

全プログラムの内容はどれも濃く大変なことも多かったです。学び、成長する貴重な機会を頂いたこと、素晴らしい仲間に出会えたことを幸運に思います。メンターの先生からは、「この経験を活かすも殺すもあなた次第だ」というお言葉を頂きました。私は次の災害に関する活動に挑戦したいと思っています。学んだことを活かし、人との繋がりを大切に、広い視野を持って、自分が目指す看護師に近づけるように前進し続けていきたいです。



佐藤 智行さん
岩手県立大学
看護学部看護学科 4年
岩手県陸前高田市出身

多くの人とのつながりに支えられ、自分の未熟だった点に気づくことができたり、リーダー像について考えたり、今までの自分が避けてきた事柄に本気でぶつかって考えた期間でした。来春からはいよいよ看護師として働くこととなります。この経験を糧に、目標としているDMATへの入隊や、災害看護分野の専門看護師資格の取得に向けて臨床の場でも努力を積み重ねたいです。そして、先輩として4期生以降の後輩たちの力になりたいです。



佐藤 未佳さん
宮城大学
看護学部看護学科 4年
宮城県登米市出身

災害看護について学ぶことができたのは勿論のこと、多くの方から、私自身がどんな人間になりたいかを考えるきっかけを頂きました。看護師として社会に出れば、プロとして患者さんの前に立つ以上、責任は重く、より大きなものになるかと思っています。今度は私が社会に何かを還元する番。この学びを忘れず、これからは自分の足でしっかり立って歩んでいきたいです。看護師を志したその時の気持ちを忘れず、今後とも邁進していきます。

BLOG

ブログで生の声を公開!

1期生、2期生、3期生のプログラム中の様子を更新している「参加者ブログ」。研修の内容はもちろん、参加者自身が撮影した現地の写真も掲載しています。彼らは何を学び、何を感じたのか。学生たちの生の声をご覧ください。

アクセス方法

下記URLまたは右記QRコードからアクセスできます。

TOMODACHI J&J DISASTER NURSING TRAINING PROGRAM

<https://tjdnt2015.wordpress.com/>





MENTOR

メンター紹介

01



1～3期メンター兼アドバイザー

小松 恵さん

岩手医科大学
看護学部 共通基盤看護学講座
特任講師

最終年度として、仕上げの年であるという気持ちでした。メンター3年目で、アドバイザーとしてもプログラムの全体把握ができるようになり、スタッフとの意思疎通もスムーズとなったことで、学生に対して期待するものが大きくなっていったと思います。これまでのメンタリングを含め、自分自身の指導のあり方を見つめ直す機会となりました。教え方と学生の特性に偏り(交互作用)があり、適切な指導方法を模索する日々でした。「これまでやってきたやり方がいつでも通じるとは限らない」ことに気づかされ、教員として自戒を持つに至りました。学生の皆様は、困難な課題に挑戦し大変な苦勞をしたと思いますが、この経験を糧に、専門職である前に一人の大人として社会のルールやマナーを身につけ、信頼される存在となることを切に願います。自分自身に向き合い、自分の強みも弱みもきちんと見つめる勇気を持って、自分の本当の思いを認識してください。それができて初めて相手の思いを理解できるようになるのではないのでしょうか。今後の成長を見守っていきたいと思います。

PROFILE

15年間の臨床経験の後、1999年渡米。St. Luke's Roosevelt病院の感染管理部門で研修を受け、NGOに就職し、NY州の看護師(Registered Nurse)免許を取得。2007年帰国後、東北大学大学院医学研究科に入学、博士課程前期修了。看護職・看護学校教員を経て、2015年から東北大学大学院教育学研究科博士課程後期在学中。2016年より岩手医科大学講師となる。

02



2期メンター

山田 智恵里さん

福島県立医科大学大学院 医学研究科
災害・被ばく医療科学共同専攻
国際被ばく公衆衛生看護学講座 教授

2016年度の研修にメンターとして参加できたことは私にも大変良い経験でした。一緒にした2名のメンターの先生方に多くを負っていただき、私は参加した学生さんたちの応援団のようなものであったと思います。意図してそうしたというよりも、常日頃「学生は自分で多くのことに気付いている。その言語化を促すことで、気づいたことを明確に認識できるようになり、かつ他者への説明能力が付く」と思っているからです。研修に参加した学生さんたちはそれぞれの学び取る力があり、感受性や考えは個性があり、優劣という基準を持つ必要もない多様性を示していました。J&Jの方々をはじめ周囲の働きかけを学生さんたちはどんどん吸収し、研修が進むにつれて言語化して発信する力は高まっていきました。この研修から得たものは実に大きかったと全員が思っているようでした。それを持って次のステージに立てる学生さんたちは幸せです。いつでも自分で得たものはどのステージでも駆ける原動力になります。それぞれが将来視野の広い看護職として社会で活躍して下さることを期待しています。

PROFILE

岩手県盛岡市生まれ。弘前大学卒業後聖路加国際病院勤務。のち青年海外協力隊で南米パラグアイ派遣。帰国後も国際協力技術専門家として12か国の途上国で働く。その間にUCLA、東京大学で公衆衛生学大学院を修了。東日本大震災後国際協力から福島県立医科大学へ。災害、被ばくの国際公衆衛生看護学を指導。

プログラム中に学生をサポートするのは、災害看護のプロフェッショナル。

東日本大震災発生時にも支援に入り、多くの被災者のために活躍されています。

学生にとって有意義な研修となるよう、メンターとしてこれまでの経験をもとに指導していただきました。

03



3期メンター

小坂 未来さん

岩手医科大学
看護学部 共通基盤看護学講座
助教

2017年度、メンターとして参加させていただき、参加学生一人一人の成長に驚き、感動しました。学生がこんなにも成長できたのは、学生自身の熱意や頑張りはもちろんのこと、それを支える関係者やプログラム内容の充実さがあったからこそと感じています。本プログラムは、米国スタディツアーをはじめとした被災地ツアーや避難所運営ワークショップ、グループディスカッション等、学生が自ら体験・参加する能動的な学習ができる内容で構成されています。学生が主体となる学習では、一人一人の個性や習熟度に合わせた個別対応が必要となるという難しさがありますが、それを支えたのが複数メンター制度であったと感じます。また、学びの土台や出発点となる他、総合化や深化につながる「体験」には、連絡、調整、学生の把握、マナーの指導といった多くの時間と労力が必要となるという難しさもあります。本プログラムでは、関係者のバックアップによって円滑な進行が可能となっているということを実感しました。参加した学生が、発展途上にある災害看護学教育のリーダーとして羽ばたいて行くことを期待しています。

PROFILE

山形大学医学部看護学科卒、看護師・保健師。岩手県立大学大学院看護学研究科修了、看護学修士。岩手医科大学附属病院、岩手県立大船渡病院等で看護師として勤務(救急センター、CCU、化学療法室等)。平成29年より岩手医科大学看護学部助教。岩手県看護協会災害支援ナース、岩手DMAT隊員。

04



3期メンター

菅原 千賀子さん

国立大学法人 東京医科歯科大学
大学院 保健衛生学研究科
共同災害看護学専攻

私は2017年度、メンターとして初めて本プログラムに参加させていただきました。災害看護学の大学院生という立場柄、日々災害について様々な事象を学ばせていただいていたはありましたが、実際に米国の現場を目の当たりにするのは私自身初めて。ある意味においては、参加学生の誰よりも期待と興奮を胸に参加させていただいたと言っても過言ではないかもしれません。そして本プログラムは、私のその期待を裏切ることのない、素晴らしい内容でした。基本講義から演習といった研修内容はもちろん、学生の理解が進むよう日々の食事から精神的なケアに至るまで、本当に沢山の方々が親身に関わってくださいました。私自身、メンターとしての役割を十分に果たせたか不甲斐なさを感じるころではありますが、皆さんのこのプログラムにかける情熱に日々奮い立たせられる思いでした。そして何よりもその期待に応えようと、日々成長する学生の皆さんを目の当たりにできたことは、私にとってもかけがえのない経験となりました。このような沢山の貴重な機会を与えて下さった関係者すべての方々に厚く御礼申し上げます。

PROFILE

東京都内の総合病院で臨床経験を重ね、その後青年海外協力隊員としてドミニカ共和国での看護師経験を得る。2011年東日本大震災にて、故郷である宮城県気仙沼市に医療支援に赴いた経験から現在、東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科にて災害看護学を学ぶ。

3段階でステップアップ。

「TOMODACHI J&J 災害看護研修プログラム」では、研修が3つのパートに分かれています。

まずは日本で基礎知識を身につけた上でアメリカへ。

米国では、災害看護の現場を見学・体験し、帰国後は学んだことを発信。

3段階の研修を通して、災害看護のスキルだけではなく、プレゼンテーション力やグローバルな視点、

そしてリーダーシップなどを身につけ、次世代を担うリーダーを目指します。

ここからは、1期から3期までの3年間の活動内容をご紹介します。

S T E P
03

学んだことを地域に還元

事後研修

「事前研修、米国研修で得た学びを、自身のコミュニティに還元する」を目的に、各自でアクティビティを企画。メンターやスタッフの協力を得ながら実際に運営まで行い、人を動かすためのリーダーシップを身につけます。

→ P23

S T E P
02

アメリカで最先端にふれる

米国研修

→ P19

ニューヨークとワシントンD.C.にある、災害に関する施設や救助に携わる団体などを訪問し、最先端の災害医療について学びます。また、日本とアメリカの医療体制のさまざまな違いも体感し、グローバルな感覚を身につけます。

S T E P
01

米国研修に向けて準備

事前研修

アメリカへ行く前に、まずは日本で事前研修を行います。現地で講義を受けるにあたり、知っておくべき基礎知識を習得。また、自身の震災体験を振り返ることで研修に参加する目的を今一度確認し、夏の米国研修に備えます。

→ P17

夏の米国研修に向けて基礎を学習

事前研修で行うプログラムは、大まかにLecture(座学)、Training(体験)、Interaction(交流)、Site Visits(視察)の4つに分類できます。それぞれ分野で災害、そして災害看護についての基礎知識を学び、夏の米国研修に備えました。

Lecture

1~3期

災害看護について改めて学び 米国研修に向けて基礎を習得

事前研修では、長年災害医療に携わってきた教授や、アメリカの医療と看護に詳しい方をお招きし、講演していただく機会を設けています。災害看護について、日米の看護に対する考え方の違いなど、知っておきたい基礎知識を習得。これらを頭に入れておくことで、現地での体験がより深い学びにつながりました。

Interaction

1~3期

震災を経験した方のお話を伺い、当時の様子を多角的な視点で知る

震災発生時、人命救助に従事した方や、南三陸町の町長からお話を伺いました。一口に「震災を経験した」といっても、状況は十人十色。多くの方から体験談を聞くことで自分の視野を広げ、あらゆる角度から震災を見つめ直しました。



VOICE

阿部 美沙さん
石巻赤十字看護専門学校 2年
福島県南相馬市出身



事前研修の中で、気仙沼で指揮隊長として尽力された佐藤誠悦様にお話を伺う機会がありました。胸に残ったのは「思うだけじゃダメ、行動に移す。迷ったらやってみること」という言葉。これまでの私は、考えるだけで行動に移せていなかったと気づきました。私たちにできることを探し、行動していかなければならないと思えた研修でした。

Training

2・3期

スピーチ練習やHUG体験を通して 座学だけでは学べない知識を実践で体感

2期からは、米国研修でスピーチを披露。その準備として、想いを聴衆に伝えるトレーニングを行いました。まずは、「私の震災体験」というテーマに沿って各自で用意したスピーチを発表。その後講師の方から、表情やジェスチャーなどの視覚的効果と、話すスピードや抑揚などの聴覚的効果について教わりました。また、3期では「HUG(避難所運営ゲーム)」も実施しました。これは、学校を避難所として利用する事態を想定し、続々と訪れる被災者やハブニングに対応しながら避難所運営を疑似体験するシミュレーションゲームです。ゲームといえど、実際の現場さながらの緊張感に包まれ、どのように行動すればいいかを考えるきっかけとなりました。



Site visits

3期

大川小学校にて、震災を経験した方のお話を聞く

震災後の現在の様子を知るため、大川小学校へ訪問。そこで、震災で娘さんを亡くされた方からお話を伺いました。「災害医療に関わりたい」と考える学生たちにとって、学ぶ決意を改めて固めるきっかけになりました。



Interaction

2・3期

過去に参加した先輩から話を聞き プログラムに対する理解を深める

前年度に参加した学生が、当年度の参加者の前で実際にスピーチを披露。また、当時の様子や学んだこと、帰国後の活動について話を聞きました。先輩の姿を目にすることで、参加者が1年後の自分たちの姿をイメージするきっかけとなりました。



Site visits

1~3期

実際の被災地に自ら立ち 被害の大きさを肌で実感

震災の被害を実感するには、その場所を訪れることが大切。そのため、事前研修では被害が大きかった地域へ足を運び、自分の目と耳と肌で感じる機会としてフィールドワークを大切にしています。1期は石巻市を訪問し、日和山公園や石巻赤十字病院を見学しました。2期では石巻市の仮設住宅へ。また、南三陸町で震災後に「養殖体験」のビジネスを立ち上げた方のお話を伺い、実際に体験させていただきました。3期は、震災当時救助の最前線で活躍された方の講話を聞きました。講話後はバスで被災地各所を見学。案内していただきながら震災への理解を深めました。毎年訪れる場所は異なりますが、実際の被害を目の当たりし、自分たちに何ができるのか考える研修となりました。



その他研修実績

- 特別講師による講演
ジョンズ・ホプキンス大学 ヴィネマ氏
チルドレンズ・ナショナル ケイトー氏
- 東京医科歯科大学大学院 大友先生による講義
- 渡米に向けてのオリエンテーション
- 石巻赤十字病院訪問
- 日和山公園訪問
- 女川町地域医療センター訪問
- 参加者ディスカッション
- 海産物ビジネスオーナー(たみこの海パック) 阿部民子さんによるお話

VOICE

志田 美波さん
岩手県立大学看護学部
看護学科 4年
岩手県釜石市出身



「HUG」を通して、実際の被災地における避難所運営では「即決すること」「情報伝達を正確に行うこと」が重要だと学びました。次々と発生する問題に対して適切に対応するのは難しく、視野を広く持つ必要性を痛感。今後、看護師として避難所運営に携わる際には、医療が必要な人や災害弱者の方をどのように支援できるかを考えていきたいです。

VOICE

山口 朋花さん
仙台医療センター附属
仙台看護助産学校
看護学科 2年
宮城県大崎市出身



大川小学校を案内してくださった佐藤敏朗さん。お話を聞く中で、命を無駄にしないというのは、「行動を起こし未来に出来事を伝え、それを活かしていくこと」なのだ学びました。事前研修の段階では自分に何ができるかわかっていませんでしたが、人のために「何か」がしたいと考える私にとって、背中を押してもらえた機会となりました。

災害医療の最先端を体感

テロやハリケーンなどを体験した方のお話を伺ったり、災害発生時を想定したシミュレーション訓練を行いました。また、多言語・多民族国家ならではの医療を肌で体感。相手の文化を尊重するリーダーシップを養いました。



01 フェアファックス郡
タスクフォース1
→ P21



07 ニューヨーク
見学



03 NYUランゴーン医療センター・
NYU看護大学 → P21



02 ラトガース大学看護学部 → P21



04 ジャパン・
ソサエティー・
オブ・ニューヨーク



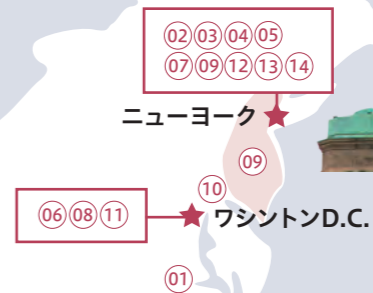
05 9.11 トリビュートセンター、
9.11 記念&博物館 → P21



06 チルドレンズ・ナショナル → P22



08 ジョージタウン大学



09 ニュージャージー州
訪問

United States

of America



10 ジョンソン・エンド・
ジョンソン本社
→ P22



12 ゴールドマン・
サックス本社
→ P22

11 米軍大学保健衛生センター → P22



13 マウント
サイナイ病院



14 国際連合



01 救助する側の話を聞く
フェアファックス郡
タスクフォース1

1986年に設立された都市型捜索救助隊、それがフェアファックス郡タスクフォース1です。ここでは、要請を受けてから出動するまでの流れや、被災者救助のために大切なことを学びました。特に隊員の「自分たちがやりたい救助ではなく、その地域で求められていることを行う」という言葉は、看護師にも必要な心構えとして学生たちの心に残りました。



救助犬ともふれ合いました。

02 現場を再現した研修を実施
ラトガース大学看護学部

ラトガース大学ではトリアージ訓練（災害時に治療の優先順位を決める訓練）や外傷シミュレーションなど、現場に必要な知識を学べる研修を実施。患者役の方にはケガをしているような特殊メイクを施し、緊張感を持って取り組みました。また、2週間の米国研修中はラトガース大学の学生も一緒に参加。生活を共にすることで、国際理解を深めました。



トリアージ訓練で治療を行う様子。

06 小児病院の災害対策を知る
チルドレンズ・ナショナル

トップレベルの小児病院であるチルドレンズ・ナショナルでは、実際に防護服を着用し、化学物質などに汚染された患者への対応を体験。また、MedSledと呼ばれる避難用具を使って、階段で患者を移送する避難訓練も行いました。病院内のホールをお借りして大きな歓迎会も開いていただき、学生が数名スピーチを発表。今の自分の想いを語りました。



人形を使った除染演習を実施。

10 衛生環境向上の歴史を学ぶ
ジョンソン・エンド・ジョンソン
本社

スポンサーであるJ&Jの本社を訪問し、衛生環境が向上するまでの歴史や社会貢献活動について学びます。また、看護学生の視点で医療の進歩に貢献する「国立看護学生ネットワーク」の方から、「私たちの考える、リーダーに必要なもの」をテーマにお話を伺いました。同じ立場からの意見を聞き、目指したいリーダー像を考える機会となりました。



看護学生からも話を聞きました。

米国研修 PICK UP

米国研修 PICK UP

03 災害での反省を活かして改善
NYUランゴーン医療センター・
NYU看護大学

NYUランゴーン医療センターは、2011年にハリケーン・アイリーンが直撃した際に多くの問題が発生しました。その教訓を活かし、次のサンディ襲来時には患者の避難方法を改善。過去の災害から学び、次に活かすことが重要であると教わりました。NYU看護大学ではハリケーンが発生した際に学生が支援を行い、5人の高齢者の命を救ったお話を伺いました。



お話を聞いた後、センターを見学。

05 記憶を風化させない大切さを痛感
9.11 トリビュートセンター・
9.11 メモリアルミュージアム

ここは、同時多発テロが起きた経緯や、飛行機の突撃で曲がった鉄骨、犠牲者の写真などを展示し、被害の大きさを伝える博物館です。また、出来事を経験した人たちと当時のことを知りたい人たちで思いを共有し、つながる場としても活用されています。展示品からは当時の様子が生々しく伝わり、学生たちは記憶を風化させないことの大切さを学びました。



白米の絆を物語る
沢山の折り鶴。

11 あらゆる場面を想定し訓練
米国軍大学保健衛生センター

この施設では人間が患者役を担当したり、マネキンやコンピュータを用いて、実際の状況に限りなく近いシミュレーション教育を行っています。シミュレーションの際に大切なのは、相手となる人を想像しながら臨機応変に対応すること。また、緊急事態が発生した場合に医療従事者としてどのようにアプローチすべきなのかを講演していただきました。



非常用持ち出し袋
(Go Bag)を確認。

12 国を超えて災害体験を共有
ゴールドマン・サックス本社

アメリカで起きた代表的な災害、9.11。その跡地の近くに本社を構えるゴールドマン・サックスの一室で、体験談を伺いました。また、2・3期では学生側も自身の震災経験をスピーチしました。災害が起きた場所や種類は違っても、予期せぬ出来事で傷ついた痛み、大切な人を亡くした苦しみは同じ。お互いに伝え合うことで、そのことに気づけたはずです。



体験を伝え合い、
同じ痛みを共感。

アメリカで学んだ経験を実践

プログラムもいよいよ大詰め。米国研修で学んだことを自分の周りで実践するため、各自でアクティビティを企画し、実際に運営も行いました。その様子を「企画」「実施」「発表」の3段階に分けてお伝えします。

企画

プレゼンテーションの練習で 企画中の内容を発表

帰国後初の事後研修では、その時点で考えているアクティビティプランを発表しました。企画を立案することが初めての学生も多く苦戦しましたが、メンターからのフィードバックを受けてブラッシュアップしていきました。

VOICE

3分間でプランの概要を説明しましたが、短い時間で伝えたいことをプレゼンテーションする難しさを知りました。また、他の人からの意見を聞き、改善点を発見。事後研修で教わったことを自分のプランに落とし込みながら、実施者と参加者、どちらにも良い影響を与えられるようなアクティビティに練り直していきました。



鳴原 菜穂さん
聖路加国際大学
看護学部看護学科 2年
福島県南相馬市出身

実施

プログラムで得られた学びを 多くの人の前で発信

プログラム全体を通して学んだことや一番心に残った出来事、そして、周りの人に今一番伝えたい想いをテーマに発表。プログラム始動当初のスピーチとは見違えるほどにプレゼンテーションスキルが向上しました。

VOICE

私は最終報告会で「人との縁・つながり・仲間」というテーマで発表。なぜなら、メンターの先生方や企画・運営に携わるスタッフの方、同じ3期生のメンバーなど、多くの人の繋がりに支えていただいたからです。プログラムに参加したことで、自分の未熟な点に気づけたり、今まで避けてきた事柄について本気で考える1年となりました。



佐藤 智行さん
岩手県立大学
看護学部看護学科 4年
岩手県陸前高田市出身

発表

さまざまな形式で 自らの学びを地域に還元

学生たちが実施したアクティビティの形式は、ワークショップや勉強会、講演など多岐にわたります。アクティビティの実績を見ると、そのどれもが「このプログラムで学んできたことを他の人に伝えよう」という熱意にあふれていました。今回はこれまでの参加者の中から2名のアクティビティをご紹介します。

過去実績

- 各地での報告会
- 原子力災害についての勉強会
- 高校生に向けた災害教育講演会(母校で実施)
- HUG(避難所運営ゲーム)を使ったワークショップ
- ケーススタディ「災害時のメンタルヘルスケア」
- 防災マニュアルの確認(アルバイト先の学習塾にて実施)
- 防災意識向上ワークショップ
- 研修報告会&災害看護勉強会
- Go Bag(非常用持ち出し袋)ワークショップ
- 所属校で災害対策サークル(NS-ACT)の設立
- 留学生向け災害対策ワークショップ/プレゼンテーション
- Donate a Photo(Johnson&Johnsonのチャリティーアプリ)の紹介
- ワークショップ「自分の命を守るために今何ができるか」

放射線災害についてケーススタディ

米国研修から帰国後、「放射線災害から考える看護について」をテーマにケーススタディを実施。仙台医療センター附属仙台看護助産学校の学生を対象とし、13名の方に参加していただき意見を交わしました。資料を作成する際には、実際に福島県で放射線災害を経験した方にお話を伺い、リアルな声を参加者に届けることができました。

VOICE

今回のアクティビティを実施するにあたって私が伝えなかったのは、「正しい知識を持つだけでは人の心まで救うのは難しい」こと、そして「不安を持ち続ける患者さんに対して、私たちは寄り添い支える看護ができる」ということ。この2つを米国研修で学び、自分の言葉で表現し、参加者の方と共有することができました。



大宮 薫さん
仙台医療センター附属
仙台看護助産学校
看護学科 2年
宮城県栗田町出身

大学1・4年生とトリアージシミュレーション

宮城大学看護学部の1年生・4年生を対象に、トリアージシミュレーションを行いました。4年生は実際の人間を相手にトリアージを実施し、1年生は見学しながらその方法を学習。学生からは「焦りや緊張で、正しい判断ができなかった」「混沌とした災害現場での情報収集の難しさを知ることができた」といった声が寄せられました。

VOICE

私はラトガース大学で、実際に泣き叫んでいる傷病者を見て何もできず、悔しい思いをしました。紙の上だけで理解したつもりにならず、実際に近い形で訓練する大切さを伝えるためにアクティビティを実施。参加者からは「実践での学びは、講義で得られる知識とは全く異なることに気づけた」という感想がありがた、ホッとしました。



佐藤 未佳さん
宮城大学
看護学部看護学科 4年
宮城県登米市出身

プログラムのなかで
将来の選択肢が
さまざまであることを
感じました

プログラムで学んだ
「共感する力」は
看護師に必要な力

災害時だからこそ話すこと。
これがメンタルケアに
繋がると学びました

その場での判断で迷った時、
プログラムでの経験を
思い出します

TOMODACHIプログラムの
卒業生と
災害復興トレーニング
プログラムに参加

経験を活かして
災害対策サークルを
学内で立ち上げました

学びに終わりはない。

「TOMODACHI」&「災害看護研修プログラム」は、参加して終わりというわけではありません。

むしろ、プログラムで学んだことを今後に活かすという点では、終了後のほうが本番といえるでしょう。

次のページからは、過去のプログラムに参加し、災害看護について学んだ参加者たちが登場。

彼らはこの研修で体験したことを活用し、仕事や学業に励んでいます。

また、3期の最後には、本プログラムが今後も継続されることが発表されました。

日本の災害看護をより発展させるため、私たちのチャレンジは続きます。

今後の方針

目指すのは、災害看護のさらなる発展

「TOMODACHI J&J 災害看護研修プログラム」は、2015年から2017年までのフェーズ1が完了し、2018年から2020年までのフェーズ2へと動き出しました。

さらに、2020年にはアラムナイ（卒業生）は約60名まで拡大します。

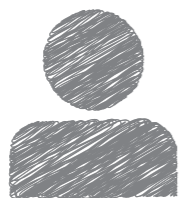
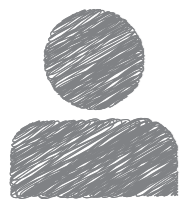
構成や内容を毎年見直すことで、本プログラムはこれからも進化し続けます。

2020年までに
約60名

アラムナイ

次世代のリーダー

参加者



プログラム参加者に期待されているのは、日本の災害看護分野を牽引するリーダーとして活躍すること。そのためには、アラムナイとなった後も学び続けることが大切です。

プログラムを修了した学生を「アラムナイ」と呼びます。アラムナイは先輩として、翌年の参加者へ学びを共有。また、プログラムで得た学びを長期的にコミュニティに還元します。

選考を経て決まった参加者は、約8か月間かけて行われるプログラムに参加。災害看護の知識やリーダーシップについて学び、次世代のリーダーになる上で必要なスキルを身につけます。



参加者のその後

学びを未来に活かす卒業生

学んだのは、将来の選択肢の豊富さ

私は2015年に参加した災害看護研修プログラムの中で、将来の選択肢が看護師だけではなくさまざまなことであることを実感。研修を通して、“現在”だけでなく、“未来”の自分をも考えた選択や準備の必要性を考えるようになりました。また、1年間を共に過ごしたみんなはそれぞれが異なった理想を持ち学んでいたのも、とても刺激になりました。今でも同期のメンバーだけでなく、2期3期のメンバーと近況報告し合うことで、日々の活力としています。プログラムを卒業した現在は、助産学生として助産師になるため勉強中。リプロダクティブ・ヘルス(性と生殖に関する健康)をはじめ、ライフワークバランス、教育活動の大切さなどを日々感じながら学んでいます。



1期生

宮川 菜津美さん

現在: 仙台医療センター附属仙台看護助産学校 助産学科(2018年3月卒業)



話を聞く大切さを学び、仕事で実践

私がこのプログラムに参加して得られた一番の学びは、災害時だからこそ話すこと、そしてそれがメンタルケアに繋がるといことです。看護師となった今、普段から「我慢しないで話してくださいね」と自分から積極的に声をかけるようにしています。患者様の話を聞くと、最後には「ありがとう、少し心が軽くなったよ」と仰る方が多く、あの時学んだ“話すことの重要性”を実感しています。同時に、看護師に対しての申し訳なさや他の人も一緒だからという理由で話すことを我慢してしまう方が多く、話す場をこちらから積極的に設けていかなければならないのだと気づきました。今後も患者様の体だけでなく心も見られるように努力していきたいです。



2期生

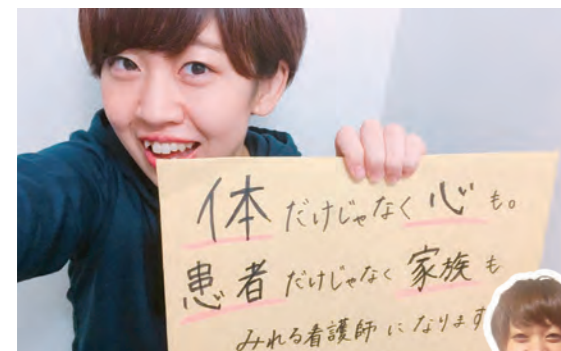
高江 由香さん

現在: 東北大学病院 看護師



米国研修での訪問先を意識

プログラム終了後、私は就職をして、小児科病棟の看護師として働いています。働いていると毎日が慌ただしく過ぎてしまっていて、プログラムでの経験がきちんと活かしているか、意識するのが難しいことも。しかし、プログラムの中で訪問したチルドレン・ナショナルで見た、医療者の方と子どもたちとの関わり方や、入院していても生き生きとした生活を送るためのサポートをする大切さを、業務中にたびたび思い出します。また、外国人の患者さんが入院されることもあるので、文化の違いに対して理解を示す必要があります。その際に、プログラムでの学びが活かされていると思います。これからも、もっと多くのことを仕事に活かしていけるようにしたいです。



1期生

星 いくみさん

現在: 東京西徳洲会病院 看護師



プログラムが全て終了した参加者は現在、それぞれの場所に戻り活躍を続けています。

これまでプログラムに参加した1期生、2期生に登場していただき、研修で学んだことをその後の学業や仕事にどのように活かしているのか聞きました。

迷った時こそ学んだことを活かす

働く上で大切にしたいと思っているのは、常に危機感を持ち、最善の準備をすること。保健室には様々な理由で子どもたちが来ます。常にその場での判断が必要とされる中で、1人で迷った時、プログラムでの経験を思い出します。あの場では、校内の体制を整えること、具体的な物の準備をすること、自分自身の心の準備が必要となること、そして日ごろから子どもたちに関わるたくさんの方と繋がりを持つことの大切さを学び、今でも日々実感しています。まだまだ、始まったばかり。これからもプログラムで経験したことやあの時感じたたくさんの刺激、出逢った方々を忘れずに、いつも笑顔で、一つ一つ努力し続けていきたいです。



2期生

佐々木 ちはるさん

現在: 公立小学校 養護教諭



学びを活かしてサークルで活動

本プログラムでは災害に対する備えの大切さを学び、学生である私ができることについて考えるきっかけになりました。その経験を活かし、私は災害対策サークル(NS-ACT)を学内で立ち上げました。サークルでは学校祭や病院の健康祭りで、地域の方に向けて防災に関する知識を提供。非常用持ち出し袋の作成例や災害時の応急処置・簡易担架の作成方法を伝え、実践を通して学べる機会を作りました。その他にも、看護学生独自の防災マニュアルを作成。実習中でも患者さんと自分の身を守ることができるよう取り組んでいます。今後も新たなことにチャレンジできるよう、サークルメンバー一丸となり、私達にできることを考えていきたいです。



2期生

石川 理那さん

現在: 東北福祉大学(2018年3月卒業)



災害時に対応できる看護師が目標

「TOMODACHI J&J 災害看護研修プログラム」終了後は、防災関連のイベント等に参加し、プログラムでの学びを地域で共有する活動をしていました。昨年秋には全国のTOMODACHIプログラムの卒業生と災害復興トレーニングプログラムに参加。今後も防災を医療や看護の面から考え続け、将来は東日本大震災を経験した看護師として、災害が起きた時に対応できるようになりたいと考えています。2018年の春から私は、東京の病院で働きます。このプログラムで学んだ「共感する力」は、災害時でも平時の病院内でも看護師に必要な力。患者様やご家族に寄り添い、患者様のQOLを考えた看護が提供できるプロフェッショナルを目指していきたいです。



2期生

澤田 陽希さん

現在: 仙台医療センター附属仙台看護助産学校 看護学科(2018年3月卒業)



SPECIAL THANKS

関係者紹介

「TOMODACHI J&J 災害看護研修プログラム」は、大学およびNPO法人の方など、さまざまな方のご協力がなければ成り立ちません。2015年から2017年までの3年間、日本、そしてアメリカでプログラムを運営するにあたり非常に多くの方に支えていただきました。お世話になった皆さまをご紹介するとともに、この場をお借りしてお礼申し上げます。

SPECIAL THANKS

お世話になった皆さま

MESSAGE



菅原 準一 教授

東北大学
東北メディカル・メガバンク機構
地域医療支援部門 部門長
母児医科学分野 教授

東日本大震災の時には、東北大学病院周産母子センターにおいて、被災地の分娩を、母子を、守るために日夜奮闘しました。当時の経験から、周産期医療における災害対策や、避難所における妊産婦対応マニュアルの発表、災害が母子に与えた影響について論文発表を行っています。2012年からは、TOMODACHI-GE 宮城子育て支援プログラムを立ち上げ、津波被災地におけるカウンセリングやセミナーの開催を積み重ねてきました。2014-2015年は、本プログラムの立ち上げ・具体化を進めました。本プログラムも3シーズンを終え、その充実ぶりを肌で感じ、感無量です。アラムナイの成長を楽しみにしており、これからも微力ながらご協力させていただきたく所存です。

PROFILE

周産期医療の専門家で、東日本大震災以降は母児を守るために災害対策にも精力的に取り組んでいる産婦人科医。東北大学医学部卒業後、東北大学医学部助手、Stanford University Medical Center (USA)、KU Leuven (Belgium)、東北大学医学系研究科講師を経て、2012年現職。多くの産婦人科関連学会の評議員や理事を担当しさらに活躍の場を広げている。

MESSAGE



江川 新一 教授

東北大学
災害科学国際研究所
災害医療国際協力学分野
教授

2015年に187か国が合意した仙台防災枠組では“健康”を守ることが大きく取り上げられています。災害における保健医療ニーズは死亡や外傷だけではなく、慢性疾患、感染症、メンタルヘルス、母子保健、リハビリテーションなど多岐にわたります。特殊な支援を要する状況にも柔軟な対応が必要です。多職種がチームを組んで被災地の保健医療ニーズに立ち向かうとき、看護師は最も患者さんに寄り添う立場で行動し発信することができます。災害対応を効果的にするためには事前の準備こそが大切です。災害看護研修で身につけた知識・技能・態度（リーダーシップ）を健康で災害に強い社会を作るために活かしていただきたいと思います。

PROFILE

1987年東北大学医学部卒業。脾臓を専門とする外科医。国立がんセンター研究所、米国ピッツバーグ大学留学。東北大学消化器外科学分野准教授から2011年3月11日の東日本大震災を契機として2012年より現職。世界災害医学会会員、日本集団災害医学会評議員、米国災害医学会編集委員、米国外科学会フェロー。

Dr. Tener Goodwin Veenema

PhD, MPH, RN, FAA
ジョンズ・ホプキンス大学
看護学部 准教授

Krista D. Cato

MHA, BSN, RN
チルドレン・ナショナル
臨床プログラムコーディネーター

レンデマン美智子 教授

いわき明星大学
看護学部 小児看護学

大友 康裕 教授

東京医科歯科大学大学院
大学院歯学総合研究科
歯学系専攻
全人的医療開発学講座 救急災害医学

長 純一 所長

石巻市立病院
開成仮診療所

佐藤 仁 様

宮城県南三陸町長

阿部 民子 様

女性起業家/
海産物ビジネスオーナー
(たみこの海バック)

佐藤 誠悦 様

震災語り部
元 気仙沼・本吉地域広域行政事務組合
南三陸消防署 副署長

佐藤 敏朗 様

認定NPO法人カタリバ
東北復興事業部
コラボ・スクール 女川向学館

小柳 明子 様

一般社団法人 地球の楽好
代表理事

SPECIAL THANKS

運営協力団体

チルドレンズ・ナショナル・ヘルス・システム

チルドレンズ・ナショナルは1870年の設立より、ワシントンD.C.を拠点に全米の子どもたちに医療ケアを提供しています。シェイク・ザード・キャンパス(高度小児医療)では、313床のベッドを有する急患治療病院のほか、3州に跨ぎ活躍する小児外傷センター、そして各種輸送手段を駆使した救命救急搬送プログラムなどを有します。全米でも様々な企業や団体より最優良病院として多くの表彰や認定を受け、小児医療におけるその専門技術とイノベーション、また地域から国レベルでの権利擁護を通して子どもたちの為に先立つ代弁者としての姿勢が支持されています。

- 所在地
111 Michigan Ave NW, Washington, DC
20010 U.S.A.
- 連絡先
+1-202-476-5000
- 設立
1870年
- 事業内容
小児専門総合病院

STAFF



John Walsh

[Title] Outreach Coordinator
[Department] Cardiology



Sarah Birch, DNP, CPNP-PC, AE-C

[Title] Director
[Department] Advanced Practice Nursing
[Academic Affiliation]
The George Washington School of Medicine and Health Sciences
[Academic Title] Assistant Professor of Pediatrics



Emily J. Dorosz, MSN, RN, CPN, CPEN

[Title] Clinical Program Coordinator- EMS/Base Station
[Department] Emergency Medicine & Trauma Center



Kenta Umetsu, MS

[Title] Manager, Facility and Biosafety
[Department] Research Operations and Regulatory Affairs

ローラシアン協会

ローラシアン協会は非営利団体として1990年に米国イリノイ州にて設立されました。様々な世代を対象とし、年間およそ総計2000人の参加者を誇る日米間の多種多様な派遣・招聘プログラム事業を行っています。2015年には70ヶ国を超える国からの米国留学を専門とする非営利教育団体PAX – Program of Academic Exchangeに統合され、現在はPAX Laurasian Exchangeという団体名で、日々変化する世界を自身の肌で感じ、経験する機会を提供しております。日本事務局はローラシアン協会として運営しており、2016年度より本プログラムの運営事務局を担当しています。

- 所在地
〒153-0064 東京都目黒区下目黒5-5-17
- 連絡先
03-3712-6176
- 設立
1990年
- 事業内容
日米間の派遣・招聘プログラムの運営

STAFF



日高 夢

プログラムディレクター



庄寄 由紀

プログラムマネージャー

協賛



ジョンソン・エンド・ジョンソン 日本法人グループ*

トータルヘルスケアカンパニーとして負うべき責任

私たちジョンソン・エンド・ジョンソンは、健康こそが豊かな人生の基盤であり、地域社会の繁栄と、発展を促す原動力であると考えています。130年を超える長きにわたり、私たちはすべての世代のライフステージに応じて、人々の健康を支えてきました。世界中の人々の健康に非常に大きな責任を負っているジョンソン・エンド・ジョンソンは、「我が信条 (Our Credo)」の理念にもとづき、ビジネスを実践し、社会貢献を通じて地域社会に対する責任を果たせるよう努めています。

東日本大震災からの復興支援について

当社は、長期的な視点で、時間とともに変化する被災地の状況やニーズを把握し、その時々が必要とされるさまざまな形での積極的な支援に取り組んできました。その取り組みは、当社が提供する医療機器等の製品を、被災地へ安定的に提供するための震災直後の物流確保やがれきの撤去作業等から始まり、岩手県での大槌町の仮設診療所建設、大船渡市の仮設住宅におけるコミュニティー活動支援、福島県での子育てママと赤ちゃん支援プログラムや子どもの発育・発達プログラム等に及びます。震災後の復旧プロセスは終了しても、復興へのプロセスはまさに進行中。今、どのような支援が必要とされているのか、未来に向けてどのような取り組みが出来るのかを考え、今後も、ジョンソン・エンド・ジョンソンだからこそ出来る支援に取り組んでいきたいと考えています。

MANAGER



伊藤 佐和
社会貢献委員会
マネジャー

2004年、ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社に入社。経理財務本部長秘書として10年間勤務し、社会貢献委員会の活動にも従事。2014年7月から専任者として、同委員会のマネジャーに着任。特に女性・子ども・東北復興支援において、非営利団体のプロジェクトをサポートする。また、「買うボラ (東北のNPOなどが提供する商品を買うことで支援する)」や「社内のチームビルディングにもつながるプログラム設計」など、“できる人が、できる時に、できる事を”をモットーに、社員が楽しんで活動に参加できる環境づくりに取り組んでいる。

SUPPORT MEMBER



日色 保

ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社
代表取締役社長/社会貢献委員長



坪井 圭子



井田 一宏

- 所在地 〒101-0065 東京都千代田区西神田3丁目5番2号
- 設立 1887年
- 連絡先 03-4411-7200(メディカルカンパニー 代表)
- 事業内容 医療機器、医薬品などヘルスケア商品の製造・販売

*ジョンソン・エンド・ジョンソン日本法人グループ
ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社(コンシューマーカンパニー、メディカルカンパニー、ビジョンケアカンパニー)、ヤンセンファーマ株式会社で構成。